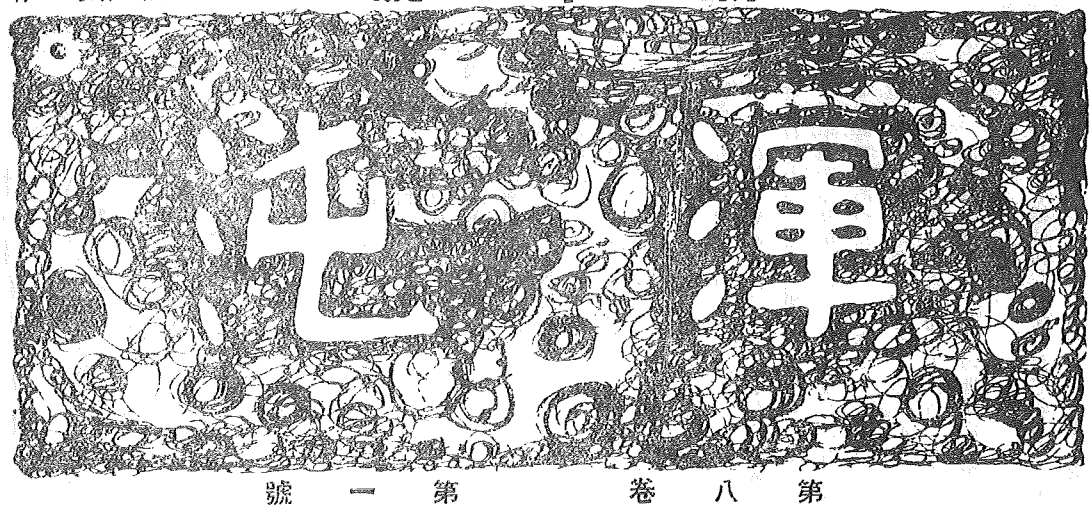
大正十一年四月五日
第三種郵便物認可

毎月一回廿二日發行

新年號

昭和四年一月十九日印刷納本
昭和四年一月廿二日發行



第八卷　第一號

◇本號目次◇

特寄	小卷
別稿	頭品
明星五年	ふりかへる心
赤井米吉	福島政雄

りへかきゆの校學

（明星學園・井の頭公園杉並木通學路）

ふりかへる心

福島政雄

年經るまゝにしみ〴〵となつてくるものは、ふりかへる心である。我が來し方をふりかへれば、四十年も夢のごとく、何のとりとめたこともない中に、あのこと此のことが蜃氣樓のやうに浮きあがつて來る。美しき蜃氣樓を美しきがまゝにふりかへつて樂しみ味ひ得る人は幸福である。「四十年も夢」とふりかへる我が心の底には、我が來し方の味氣なさがつく〴〵と感ぜられる。

辿りは現實の辿りである。おもひてはとほきおもひでゝある。さはれ遠きおもひでながらにそれは我が現實そのものゝ内容である。いたましさにみつる我が現實そのものゝ内容である。

理想はくづれた、幻影は去つた。殘るものは孤心さびしき我れである。その理想をひたすらに追つて居た我が青年期をふりかへれば、此の我れにも一度は純な心の時期があつたやうにも感ずる。一すぢに聖賢の境涯に憧憬の心を運び、ひたぶるの心を以て人と交り、純一の心を以て人に恥ぢ人にあやまることも出來た。涙は常に眞と善と美との世界にむかつてそゝがれた。

然るに今の我の有樣は何たるすがたであらう。すべては空に歸した。ひとすぢの心や純一の心も空に歸した。殘るものはなまぬるき我れである。過ぎし日のまぼろしのはかなさに涙するなまぬるき我れのすがたである。

生ぬるき心の底に動くものは何であるか。我が生ぬるさのうちにもおさへられぬ心は何であるか。それはその生ぬるさをふりかへる心である。その生ぬるさに涙する心である。おもひでも痛切でなく、將來の希望も痛切でなく、たゞ現實の生ぬるさに歩みをとゞめて居る我がすがたをふりかへる心である。それが過ぎし日をふりかへる心と入り亂れて、つく〴〵と自己生命の空のすがたをおもはせる。

人生は空である。併し我が生命こそ空の又空である。我が生命に眞實相なく、我が生命に永劫のすがたもない。昨日は昨日のことにかゝづらひ、今日は今日のことに苦しむ。一日々々を糊塗してすごし、一日々々たゞ徒らに事なきを願ふ。驚かず覺めず、たゞ我が煩惱の長夜のねむりの中に憩ふ。

かやうにして昨年もすぎ今年もまたすぎて行く。まことに人間忿々として衆務を營み、年命の日夜にすぎ行くをさらない。忙しく外なることに迫はれ迫はれて、我が内なる世界のことはいつしか他所事となつて居る有樣こそ我が唯今の生活である。

他人にむかつて内面的となれと言つて居る我れは實は自身においては外面的に外面的になつて居るのである。此の數年來の我れをふりかへつて見れば心持は次第に淺薄から淺薄を追うて行つて居る。煩惱から煩惱をあさり、煩惱を肯定する根據を見出したいなどゝさへ考へたこともある。我が生命の根底は微温化せられて、我れには何等の熾烈なる求道心もない。我れは我れ自身の生命の根本をごまかして生活をして居る。

すべては空であるなどゝ言つて、その空といふ言葉のかげにかくれようとして居る。我が身の根本問題はいつしかおろそかにして、徒らに外界にむかつて空をさけんで居る。

おもへば我れはいつしか一種の虛無思想にとらはれて居る。自然主義ではないと言ひながら、いつしか我れにおける自然を肯定しようとして居る。あゝ此のごとくまでも執念深い我が生命の根本惡、此の根本惡にどこまでもひかされて行かうとする我が身、ふりかへればそこにはたゞ無限永劫の沈淪があるばかりである。

まことに空といふは客觀界を眺めての空ではなかつた。此の我れこそ空の根本焦點である。我れの空、我れの絶對無價値、そこに煩惱は無限に否定せられて行く。煩惱無盡誓願斷、煩惱の根據を求めようとしても、それは蜃氣樓のごとくに消えて行く。此の荒れ狂ひ、さわぎ亂れ、或は生ぬるくよどみ沈んで行く煩惱そのものが無根據の存在である。

或は功名心となり、或は事業欲となり、或はすべての仕事を怠邊する心となる。一心常に轉じて恒常のすがたなく、浮草から浮草を追うて行く。此の煩惱心に價値があるとは、夢幻に醉ふものゝ言である然るに我れはいつしかその夢幻に醉うて居る。何ものが我れにかゝる心持をもたらしたのであるか。外に求めて内に求むること無き我が此の心こそはくせものである。我が此の心故にこそ我れは常に夢幻を描いてこれにあこがれの情を寄せて居るのである。此の有樣を觀ずるとき、我れは涙の中に我が生命の空を見る。

煩惱の亂れの空を根本的に徹見せしめられて、久遠の慈光によみがへつたのは、我が二十六歳の夏で

大正十一年四月五日第三種郵便物認可
昭和四年一月十九日印刷納本
昭和四年二月廿二日

編輯兼發行人　東京府瀧野川町字田端三三渾沌社

印刷者　石川縣金澤市中町九　中村外雄

あつた。さりながら其後十五年の歳月を送つて來た我れは、いつしか次第々々に過去の宗教的体驗そのものを偶像化し功利化して居たのではないであらうか。我が生命の硬化はそこからはじまつた。我が宗教の世界は我れの生命の現在の現實そのもの〻世界である。過ぎし日のことはすべて夢の又夢、たゞ此の我れの現實の一念の裡にひゞき、我が生命に照徹し來る久遠の慈光のみが我れの世界であつた。忘れに忘れて行く我れをおもひづめにおもつて下さるといふその切ない佛の御心をおもへばまことにたゞ勿體なさがあるばかりである。

昨年は去り今年とあらたまつても、我れの生命の此の一念はつゞいて行く。此の一念裡に一切のことは融けて行く。我れは我が夢まぼろしの蜃氣樓に恥ぢる。而してまたしてもまたしても蜃氣樓を見ようとする我が心は、人にも世にもすてらる〻心であつて、たゞ久遠の親心なる御佛の世界にのみ攝取せられて行くことを感ずる。

感謝せずしてさまよひ、さまようてひとり淋しがる此の身は、誠に三界流涙の兒であつた。一念感恩の心にかへるとき、どこまでもさまよひ行く我がすがたにたゞ空のすがたを見る。まことに空とは恩光の下に照さる〻我れにおいてこそ直ちに味はる〻ものであつた。虚無主義も無く自然主義もない。たゞ虚無とか自然とかにさまよふ自己の生命こそはどこまでも空であつたのである。

最初の廻心の体驗から今日に至るまで十五ヶ年の間には、結婚といふ人生の大事を通り、幾人もの子供の父となつて居る。然るに此の我れは今日なほその事に目が覺めて居ない。なほ二十年前の青年期のやうにわれひとり肉親の膝下に甘えたその甘え心が去らない。生みの父母を失つてたへがたい悲しみと淋しみの中にあかしくらしたときも、我が心は妻と子との世界にむかはず、我が產みの子に對する親心もなく、たゞ世を去つた父母をおもつて、またさまよひの旅に出かけた。おごそかなる事實は眼前にあるのに、それに氣がついて居ない。自己とは何であるか。妻は自己ではないのであるか。子等は自己ではないのであるか。此の自己をふりすて〻さまよひ行く心、まことに久遠の沈淪の心二地獄は一定すみかぞかし」とはよそ事ならぬ我がことであつたものを、いつしか妻を相對の世界に見、子等を相對の世界に見て自己を限局しようとする。まことに家の亂れの根本は此の限局する我れに存したのであつた。

相對主義を排しながら自己はいつしか相對的行爲が恣にしふ相對の心を起して居る。我れは我れの中においてます〳〵分離しようとする。分離は死である。我が魂の死、煩惱の亂れの中に立ちのぼる死氣濛々として居る間にあつて、我れの此の煮えきらぬ有樣はそも何といふことであらうか。

此の煮えきらぬ我れあればこそ、此の相對煩惱の中にうごめく我れあればこそ、此の我れの心を融かしつくさずんばやまずといふ佛の御いのちがましますのである。我れのいのちと一つになつて苦しみ惱みたまひ、しかも遂にはその苦惱を消しつくさずんばやみたまはぬのである。何といふしぶとい我が心であらう。此の御佛のいのちの前にもなか〳〵にとけきれず、隙さへあればさまよひをつゞけようとばかりして居るといふのは。

まことにどこしへにさまよひ行く我れ一人の生命を目がけたまうての不可思議兆載永劫の佛の御修行であつた。此のいつこまでも亂れ行く我れは、遂には佛身より血を出さずにはやまぬ我れであつた。何といふ我れのあさましさ、何といふ救濟の有りがたさ、此の我れをどこまでも見すてたまはぬ佛心のうれしさ、苦しみの中より、涙の中より遂に湧き來るは報恩の心である。

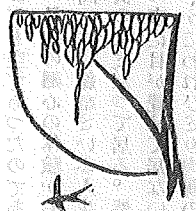
ふり反ればそこには全生命慈悲の佛心ましまず。ふして見ればそこには全生命煩惱の我れがある。我れが我れに反逆すればするほど、佛心の攝受の御力はたゞ此の我れ一人にむかつてはたらきかけたまふことを感ずる。執心の我れはくだけてうれしさの中に立つ。感恩のおもひの中に立つ。妻もその中に立ち子もその中に立つ。ひとり〳〵別れ〳〵の苦しみの中に、遂には生命のひゞきあひにあふ。

まことに此の微妙の心境を味ひながら、常にこれをふりすて〻夢幻の世界を辿らうとする自己の有樣を見せしめらるればたゞ慚愧あるばかりである。慚愧の中にたゞ一人の行路としての人生をたどる。しかもそこに妻あつて我れのために道の友となり、子あつて我れのために道のたよりとなる。

「家の父よ、汝の義の味ひ、汝の妻の歡喜に充ちたる信順、並に汝の子供等の衷心から魂を高める感恩の情こそは、汝の信仰の結果である。」ペスタロッチの此の境地もほのかにうかゞはれる。

「我が妻子ほど不便なることなし。それを勸化せぬはあさましきことなり。宿善なくばちからなし。我が身をひとつ、勸化せぬものがあるべきか。」

蓮如上人の御教訓がしみ〴〵と身にしみて、まことにはづかしくうれしく、言ひ知らぬ感に打たれるのである。



明星五年

赤井米吉

一、はしがき

松本君

明星學園を創立してからもう五年たつた。私共が成城を去つて明星を創めようとしてゐた時、秋吉の本間俊平先生が

「……人事大概如此事に候、されど神樣はこのS字の邊より人の出來ない新工事を始め下され候上見て御進み下され度、凡ての事感謝すべし、斯る場合にも人を咎めては不相成候、皆大なる世界へ押してくれる助け手に候、御勇進々々々」

と戒められたが、五年を過した今日顧みてほんとにさうだと思ふ。あのまゝ公立の學校に居たら今頃は如何なつてゐたらうか。あのまゝ成城に居たら如何だらうか。なぜゝ時々あらぬ空想に耽りつゝ、現在の自分を省みるとしみ〴〵多くの人々の情を感じて來る。我師、我友、我助け人は勿論のこと、その當場は我が敵人とも思つた人々さへも皆よつてたかつて私をこゝへ導き出して呉れたのかと有難く思ひ、濟まなく思ふ。

五年は永い樣で短かかつた。私共の明星の仕事はこれからである。まだ何等の結論にも達しておらぬ私共はまだ〳〵默つて努むべきであらう。然し私の教員生活から云へばもうこゝが一番長いことになつた。松山が四年三ヶ月、小濱が三年、武生が二年三ヶ月、秋田が七ヶ月、成城が二年、(隨分轉々したものである。)で何となく過越方を顧みてその經過を記し、御世話になつた人々にこゝの仕事の一般とこの五年の間の私の心境の發展とを報告しなければならぬ樣に感ずる。兄の主宰する「渾沌」にこれが掲載を諾はれたことはほんとに有難い。かつてペスタロッチの「スタンツの手紙」が載せられた「渾沌」に、これはそれとはくらぶべくもないものだらうが、極めて小さな意味でその流れを汲むこの仕事の報告を書くにあたつて私の心の高鳴りするのか笑つてはくれるな。

「如何程、余の試圖が微弱であり、不運であつたにせよ、いつかは更に幸福なる後の世の人が、必ず現に破綻してゐるその點について余の希望の糸を拾ひあげるであらうと余の信じてゐる理由を考察することに、人道の友は暫しの時間を吝みはせぬであらう。」

とこの彼ペスタロッチの言葉を正しく受ける兄の讀者諸君へ、同じ理由で暫しの時を賜はらむことを祈るのである。

二、創　業

大正十三年二月二十九日午後一時過ぎ私は大崎治部君と共に案内の人に導かれて今の校地、井の頭公園南の麥畑の中に立つた。學園を創設しようとの相談の起つたのはその二三日前のことであつた。三鷹村の奥に大崎君の友人の農場のあることを聞いてその地を檢分の爲にこの日午前出て來たのであつたが吉祥寺驛から凡そ二十町も距つてゐるので到底物にならぬとあきらめて歸途についた時、不圖路傍の人に教へられてこゝへ來て見たのであつた。二三寸伸びた麥畑は南へゆるい傾斜をなして廣がつてゐた。暖い春の陽がぽか〳〵と照つて、陽炎がちら〳〵と騰つてゐた。驛へは八丁位、井の頭公園の森が北に茂つて、あたりには人家兩三軒あるのみであつた。私の心は躍つた。私は何の猶豫もなくこゝに決心してしまつたのである。たゞの一日でこの樣な善い位置が發見されやうとは夢の樣であつた。私共の仕事が意外に早く成立したのも一つはこの樣な奇蹟的な助けがあつたからである。

三月十六日、最初の同人照井、山本兩君と私は皆家族を引き連れてこの地に集つて「明星學園建設敷地」の立札を立てた。學園の名稱は始めから同人の間に色々と議せられてゐた。「啓明」「黎明」「三鷹」「井の頭」「櫻の丘」なども考へられたが滿足されなかつた。或る日敷地を見に行つた歸りに、夕暮を井の頭公園の森を逍遥した私はその美しい星の光に驚かされた。何だか始めて星を見る樣な心地がした。(その後も感ずることであるがこの附近の星の光は他とは違ふ。實際美しい。)それは所謂「明星」そのものではなかつたゞらう。然しその時不圖この言葉が胸に浮んだ。ついに皆の意見も「明星」と決定したのである。幼い子等の心の明星、人類の憧がるゝ理想の明星、それを慕つて、それをみつめて伸びよう、登らう、精進しようとの意味であつた。マークもその意味で松岡政雄氏に意匠を頼んだ。氏は直ちに銀の圓

るい枠に赤の五出の星をはめたものを送られた。圓は宇宙を表徴し、完全を示す。星は理想を表はし、赤は人間の至情を意味する。極めてはつきりとしたものであつた。

三月二十四日、學園創設の趣意書と兒童募集のチラシ八千枚を新聞紙にはさんで新宿以西の中央線沿線の郊外住宅へ配り、同時に新聞紙に募集廣告を出した。趣意書は次の樣であつた。

幼き日の印象は人の生涯を支配します。幼き者の教養について社會がほんたうに覺醒せぬ內は、民心の作興も思想の善導も庶幾されませぬ。勿論之は家庭、社會の風潮と至大な關係のあることで、獨り小學校教育のみの仕事ではありませぬ。然し現代の世相をなした一半の責は過去の小學校教育も背負はねばなりません。されば我子の行末を案ずる者、社會の前途を憂ふる人は先づ小學校教育の改善を計らねばなりません。輝く日光、新鮮なる空氣、滋養に富む食物、是等三つのものは凡ての成長の大要件です。地に樹つ草木、空に飛ぶ鳥、生とし生けるものは皆是等によつてその生命を伸ばすのです。幼い人の子の成長も亦さうです。然るに塵埃の巷に建てられた學舍、數十人を壽司詰にした教室は果してこの要件を滿し得ませうか。よしや食物の研究が進み、醫藥の新發見が如何に遂げられても、これでは幼い者をはぐくまれません。郊外へ——陽の光を全身に浴び、清らかな空氣を胸一ぱいに呼吸する郊外へ、幼い者を救ひ出さねばなりません。

輝く理想、新鮮なる校風、生命に充てる教訓、是等三つのものは幼い魂の成長の大要件です。神と自然と人間が與ふる聖い教を燈とし、温い友情の風を呼吸し、至高の理想に向つて幼い魂は伸び上るのです。浮草の如くに轉々として定まらぬ教師と點數と競爭で驅られる兒童が雜然たる知識の斷片の蒐集を事としてゐる現代の小學校では幼い魂の伸びやうもありません。新しい教育へ、幼い者を救ひ出さねばなりません。

かゝる考をもつて、森幽に水清き井の頭公園脇に一千坪の大地とさゝやかな學舍を得て、友情に燃える私達が隱れた後援を誓はれる一教育愛好者に勵まされて新しい教育の樹立を企てました。思へば教育に身を捧げて茲に十數年、互に紆曲の道を辿つて遂にカナンの地を得た心地がします。どうかこのさゝやかな芽生がよき成長を遂げます樣、御援助を願ひます。

兒童募集には次の樣に記した。

一、名稱　明星學園（尋常小學校）

一、位置、井の頭公園辨天黑門前（吉祥寺驛より七町）

一、募集人員及學年、尋一、二、三、各級男一五女一五宛

一、開校期日　四月二十日の豫定

一、授業料　六圓

一、申込所　市外千駄ヶ谷九一一　赤井方

毎日午後一時より四時迄の間に御手樣同道で御出下さい。

開校豫定は四月二十日としたものゝ實は校舍の建築契約もこの日漸く出來たのであつた。學校とはたゞ一本の立札だけであつた。思へば無謀なことであつた。建築屋にはどうか一ケ月間に出來上る樣にと念を押したが、それも後から考へれば無理な注文であつた。が兎に角にかうして兒童をまつことになつたこれ等の仕事を了へてその夕私は東京を發つて遙かに壹岐の島まで講演の旅行に出た。この樣な忙しい時に、かゝる旅行はしたくないとも思つたのであつたが、そこへ行く約束は既に一月の中に出來てゐたのであつた。一度は中止を願つても見たのであるが同地の人々の切なる希望と在京の方々の熱心な要求があり、且つ一旦約束した義理もあるので、つひに留守中の仕事は照井、山本兩君に依賴して出かけた然しこれは私には決して損なことではなかつた。二月末にこの計畫が始まつて以來晝夜兼行の奔走をして、殆んど猪突盲進の狀態であつたので、旅路とは云へ、少しでも自分を反省する機會が與へられたのは喜ぶべきことであつた。夕暮の空に聳ゆる富士の姿、博多灣頭の日蓮の巨像は大いなる奮起を促す樣であつた。この二つの姿はそれ以來私の夢に入り、幻に浮び、私の憧れになつた。後になつて富士に登り、清澄に詣つたのもこの爲であつた。

留守中照井、山本兩君は毎日午後に私の家へつめて入學申込の來るのを待つた。終日一人の來客もなく、空しく歸る日も少くなかつた。私が三十一日の夜歸宅するまでに申込だものは漸く五人に過ぎなかつた。

四月二日にはかねて成城小學校と大阪毎日新聞社で計畫してゐたパーカースト女史が來朝された。これから十六日迄私は女史の講演を通譯して東京に、仙臺に、富山に、高岡に、金澤に飛び廻り、その間に一寸歸つて敷地や、建築會社へ行き、又講演地へ向ふと云ふめまぐるしい日をおくつた。この通譯も私は辭し度いと思つたのであつた。然しもと〳〵この計畫の案をたて、成城と大毎を結びつけたのは私

てあつたのでどうしても脱退することが許されなかつた。然るにかうした忙しい私達の間へ更に一つの大きな事件が降つて來た。それは照井君の嚴父が亟かれたことであつた。

四月五日朝、私はその日から始まるパーカースト女史の成城學校に於ける講演の通譯の準備をしてゐるところへ照井君がやつて來た。そしてその前日上京せられた嚴父がその夕突然腦溢血の爲に倒れ、つひに歸らぬ旅路につかれたことを告げた。この大事業の門出に、これは又何ぞ云ふ恐ろしい試煉を與へられるものであらう。私は茫然として暫し云ふべき言葉を見出さなかつた。嚴父その人も教育者であつた。五十年の教育生活を丁度その三月に止めて、余生の第一歩を我が子のところでなすべく同君のところへ出て來られたのであつた。そしてその日直ちに學園の敷地を訪れ、あたりの風光の美をしきりに賞せられたと云ふことであつた。然るにそれはこの世に於ける最後の御仕事となつたのである。噫、私達がしきりに新しい誕生を考へてゐた時に、突如として、實に突如として、これは私達に人生の歸趣を思はせられたのであつた。その頃の私達はたゞ大いなる悲みの涙にくれて、その眞意を悉く知るの明知と信仰を持つてゐなかつた。然し今にして思へば、これも我學園創設の第一頁になくてはならぬ大いなる教訓であつた。凡そ生るゝものは皆この大なる事實を先づ心得て置かねばならぬことであつた。嚴父はそれを教へられたのであつた。世の常ならぬ大いなる仕事であればこそかゝる苦しみと涙も必要とせられたのであらう。

私はパーカースト女史の方の仕事に全然かゝらねばならぬのでかうした同人の悲しみにも共に參ずることが出來ず、成城に於ける講演の終つた七日の夕それは葬儀の終つた夕迄ついに御弔にも行かなかつた。照井君は遺骨を奉じて九日郷里へ歸つた。私はパーカースト女史と奔走してゐる。その間に飲料水の分析表を取つたり、設置願書を府へ持つて行つたり、入學申込も受け附けたり、一切の仕事は山本君一人でなされたのであつた。同君の苦心の程思ひやられる。

照井君も歸京し、私も女史と離れて三人で又相談出來る樣になつても、困つたことには校舍の建築は一向に捗らない。毎日車に一臺位づゝしか材木が運ばれなかつた。大工小屋が出來て釘の響きだしたのは四月二十一日であつた。これでは魔法を用ひない限りは四月中に出來やう筈がない。止むを得ず十五日開校と云ふことにして、五月一日に父兄を召集してその諒解を求めた。その頃のもどかしさは筆につくされない。が兎に角に五月五日には漸く上棟式、十四日はコヤラの屋根だけ出來た。勿論床も張れず腰板も出來てをらぬ。然しもはやこれ以上に延期は許されない。その翌日を以て開校式をあげることにした。

三、開　校

五月十五日、愈々開校の日が來た。が何と云ふことだらう。朝から涙の樣な雨がしと〳〵と降つてゐた。校舍は出來上らなくても、この美しい風光を見せて、森の學校の主張で大氣焔をあげやうとの計畫も臺なしになつた。目出度い開校の日でありながら私達の心は躍らなかつた。殊にこの日は地方の講演を終つて再度上京されたパーカースト女史に來校して祝辭を述べてもらうことになつてゐたのであつたが、この雨ではそれも出來ない。私は朝起るや直ちに東京へ出て、(私は四月の末に居を吉祥寺へ移してゐた。女史にことはりを云ひ、澤柳博士だけを迎へて來た。雨は愈々強くなり、風さへも加はつて來た泥濘の中を博士を案内して來る途中の心苦しさ、穴あらばはいり度い樣な心地がした。その博士も今は故人となられた。私達のこの小さな企の爲に深い同情をそゝがれ、忙しいからだで心を遙々こゝまで運ばれた故博士の知遇はどうしても忘れられない。せめて第一回の卒業生の出るのを見て下さつたらとの感、切なるものがある。

それでも兒童父兄は皆集つてくれた。一年七人、二年五人、三年九人、總勢二十一人、職員四人の學校はかくして始つた。だが雨はもり、風は吹きこみ野天とかはらぬこの學校の前途、父兄は何と感ぜられただらうか。辛じて創立の趣旨を繰返して語り、澤柳博士の顧問としての御挨拶を願つて式を閉ぢ、組々に分れて種々相談して解散した。勿論記念撮影も、植樹も出來なかつた。

然し次の日は綺麗に晴れた。井の頭の新緑は洗はれた鮮かさに輝いた。父兄の方々はこの日もほとんど附添うて來られた。前日出來なかつた記念植樹を入口になる處の左右に、職員、兒童一本づゝ植えた最も壽命の長いと云はれる公孫樹だ。伸びよ、茂れよ空を蔽へよ、私達の生命を表はしてと希はれた。それから校庭で一枚、森の中で一枚、記念の撮影もした。私達の心もこの日の空の樣に晴れ渡つた。お産をすませたお母さんの心もかくやあらんと思つた

校舍はまだ〳〵出來なかつた。然しそれも考へようによつては却つてよかつた。こゝは兒童の家であつた。教師ばかりで考へてはいけない。これから皆

て考へて立派な學校を建てよう」とも云つた。三年は山本君、二年は照井君、一年は照井げんさん。天氣の良い時には大抵森の中へ入つて、雨の日だけ内へ入つた。私の宅でお稽古をした日もあつた。校舍の方は大工を急がせ乍ら、私達は毎日兒童と共に校庭の手入をした。自然科の第一歩はかうして自分だちの家の爲の營みとなつたのは意味あることであつた。校舍の日に〳〵完成に近づくのを見るのも心地よかつた。正面に土手も出來た。周圍に大きな樹木も植えられた。次第に學校らしいものが出來て來た兒童も續いて入つて來た。私達の明るい心地がずつと續いた。

かくて六月二十一日には校舍も完全に落成したので、兒童三十人とその父兄と知己の人々と共に芽出度い落成式と開校披露式をあげた。

その日は朝から日本晴れで、梅雨には珍らしい天氣であつた。初夏の色が木々に漲つて、門に立てた日の丸の旗は薰風にひらめいた。又開校式の日の樣な目にあひはしないかと内心びく〳〵してゐた同人も勇み立つて準備にいそしんだ。母姉の方々も朝から手傳に來られた。皆の面に喜びの色が滿ち〳〵て、「おめで度う」の挨拶がしきりに取りかはされた午後一時頃から來會の人々を迎へる自働車が吉祥寺驛と學校の間を幾度も幾度も往復した。式は午後二時に開かれた。私が挨拶を兼ねて開校の次第教育の方針を述べた。それから澤柳博士の講演、來賓祝辭を栃内海軍大將、福田北多摩郡長、羽仁もと子女史小瀬松太郎氏、父兄總代祝辭は中川景輝氏、終りに兒童の唱歌、「お星さま」があつて一先式を閉ぢ、暫く休んで一同立食をして解散したのは四時過ぐる頃であつた。多くの人々は尙後まで殘つてあたりの風光を賞して久しく話して居られた。來會者七十、三鷹の村には珍らしい集りであつた。凡ての人々が歸られてから同人は暮れ行く校庭にテーブルを持出して星を仰いで喜びの杯をあげた。二ケ月前の寥廓に今や人類文化の一つの泉が湧いてゐる。奇しき攝理感慨實に無量であつた。言に云ふ

「荒野に水はわきて、沙漠に河も流がれん、
やけたる沙地は池となり、うるほひなき地は水のみなもとゝかはらん。」

文字はそのまゝ我學園の豫言ではないか。妙なる哉だ。私達は法悅に浸つていつまでも語り暮した。

當時學園の敷地は一千坪、落成した校舍は百九坪三間に四間の教室五つと事務室、小使室、物置、便所で、その工費壹萬貳千圓、バラックとは云へ心地よい建物であつた。南側にタ、キの廊下を置き、教室からすぐに庭へ下りられる樣な構造にした。兒童を出來るだけ外へ、土へ出さんが爲であつた。

四、教　科

校舍も出來た、教育の内容については開校準備の間も殆ど毎日の樣に同人は集つて研究してゐたのであつたが、今や愈々落付いて討議も出來る樣になつた。當時の教科及時間は次の樣に定めてゐた。

	一年	二年	三年
國語	一二	一一	一一
美術及自然科	五	五	五
音樂及体操	五	四	四
數學	—	五	五

學科としての數學の仕事は二年から始め、一年では兒童の日常生活の間に於ける數觀念の自然的發達を待たうと考へた。數學の始期に就いては當時も我教育界に問題のあつたことであり、今日も尙つきない當時私達は凡ての學習が常に兒童の内からの要求に即すべきであることを信じてゐたので、この教科に就いては尋一時代は尙早の感をいだいてゐた。然しそれは教科としてなす數學の仕事の内容を現行文部省のそれにのみ置いたものであつた。その他の仕事を考へれば尋一でも數學の仕事は多々あり得たであらう。然しそれに就いてはまだ十分な案が立てられなかつたので、暫し私達の案のたつまで、かうして兒童の發達を待つ方が得策と考へたのである。

美術と自然科を一つにして考へたのはその間に一脈相通ずるものがある樣に思はれたからである。自然科の中には理科の初歩として、科學的研究への前提としてのものゝあることは勿論であるが、兒童の自然に對する態度にはこれを美的對象として、これを全的に眺める風のあることを感じて二つを一つにして時間數を定めたのである。勿論時によつて全然科學的に取扱ふこともあれば、全然美的に取扱ふこともあつた。音樂と体操もかのダルクローゾのレトミックの主張の樣にリズム、ハーモニの身体的表現が音樂教育の方法として非常に必要なものであり、体操、ことに低學年の体操にはリズムが擔はすことが兒童の心理的、身体的發達に伴ふものと考へて一つにして時間を取つた。これも体操の時には必ず歌を歌はせるか、ピアノを彈じてやらせると云ふ意味ではなかつたし、音樂にはいつても身体的活動を伴はせようと云ふわけでもなかつた。兩者に一つのリズムの相通ずるものゝあらうことを考へ、その方法を工夫せんとの意圖に外ならなかつた。

然し私達はこゝで私達が既に有してゐた多くの教育上の最良の方法を實行して、最も優秀な人を造り

出すと確信してこゝの仕事を始めたものではなかつた。寧ろ色々の試みをして眞に善き方法を見出さむとの念願に外ならなかつた。當時私達が共同の研究問題としてゐたものは、

一、この環境を如何に我々の教育に取入るべきか——自然科や美術の仕事は云ふまでもないが、更に凡ての學習を生活たらしめる爲にこの環境を如何に處理すべきであらうか。——若しこの問題が解決したら我國の田園の學校の教育に可成大きな問題を投ぜられやうと考へた。所謂教育上の改革が多く都會地から發祥するのは餘り面白からぬことである。どうかして田園の教育を振興させたいと思つた。

二、戸外教授業がどれだけ迄に行はれ、如何なる方法で行ふのが最も有効であるか。——從來外國で行はれたオープンエイヤスクールは多く病弱兒の爲であつた。健康兒の爲にそれは考へる必要のない事であらうか。私達はそれも必ず善い事であらうと考へた。然しその方法は如何、——若し之が解決するならば兒童保健の問題に大なる光を投ぜられる筈である。然して之も亦田園の學校の一工夫とならう。

その他問題は多々あつた。勤勞教育の問題などもその一つであつた。六月の末には馬鈴薯の收穫期であつたので、百姓の畑に行つてそれを掘らせて貰ひ皆で洗つて、共に食したりした。勿論まだ低學年の兒童のことであるから大きな作業は出來なかつたが、かうして土に親しむ機會は多かつた。

七月になると井の頭公園のプールが開かれた。二三年の兒童に二三泳ぐものがあつたばかりで他は皆駄目であつたが、淺い兒童の徒渉池で毎日午前十一時頃から水遊びをした。學園で裸体になつて、畑の中をぬけてプールへ駈けつけるのである。學園の存在を知らぬ水泳客は皆驚きの眼をみはつた。

五、疑　惑

五十五日の長い休暇を終へて一同が山や海から歸つて來たのは九月六日であつた。新入兒童九名を迎へて三十九名の學園は第二學期の仕事を開始した。内部も次第に備つて來た。清涼の季と共に同人は實際に、讀書に、思索にひたる時となつた。兒童はまだ定員に滿ちないが、色々研究しなければならぬことがあるので美術科を松岡正雄君に、自然科を小松崎三枝君に助けてもらうことになつた。

然しその頃から私は豫期しない惱みに陷つた。勿論突然に起つたものではなかつた。休みにあちこちの講演に廻つて歩いてゐる間も學園の仕事は一時も忘れ得なかつた。特に朝鮮の一週日は幾多の大きな問題を考へさせられた。鐵道が敷かれた。電車が走つてゐる。一切の文明的施設が着々として行はれてゐる。確にすさまじい勢で發達してゐると云へよう。然しそれが果して朝鮮の人々に幸福であらうか。私は敢て桃源の夢を求めるものではない。然しかゝる物々しい物質の文明は果して彼等の精神を向上せしめるものだらうか。形をかへた人間の獸性が愈々跳梁するのではないか。そしてこの火に愈々油を注ぐものはそこの學校教育ではないか。だがこれは朝鮮だけの問題でない。虚心に考へた時、全然元に歸つて考へた時、内地の教育だつてさうではないか。否な私達の生活凡てがエタイの知れぬものではないか出口のわからぬ迷宮に入つて、八幡藪を廻つて歩いて、進歩だ、向上だ、新しいと云つてゐるのではないか。考へて來ると疑問は疑問を生み、惑ひは惑ひを重ね、愈々迷宮深く入りこむのみであつた。

これがわからないで何の教育が出來ようか。或夜不圖私は取り返しのつかぬ失態をした樣な氣がして悚然として慄えた。校舍さへ出來れば何か出來さうに思つてたゞ〳〵焦慮してゐたことが我ながら愚かしく思はれた。教育とは如何なることか。教育の目的は何か。いや〳〵人生そのものは終に何か。それがわからないで何が出來るか。讀方とは一體何をするのか。算術をして何になるのか。そんな事はどうの昔にわかつて居た筈だ。十年以上も教員生活をしながら今更この樣な問題に苦しむとは何だ。と考へながらわからぬものはやはりわからぬ。

この迷ひは秋の深まると共に深まつて來た。初めは一片の暗翳の樣なものだつたのがやがて滿天を蔽ふ暗雲となつてしまつた。私はもう學園へ顔を出すのも恐ろしくなつて來た。然し現實の事實は私の惱みを知らぬ樣に進んで行つた。兒童はその後も引きつゞき增して來た。二學期の半には四十五人も數へる樣になつた。のつぴきならぬ羽目になつてゐる。「自分を省みないでこんな仕事を始めてしまつてどうするつもりだ。」私は耐へ難い思ひがした。この私の態度は勿論同人諸君にも感ぜられた。諸君の不安な氣持が又私を暗くした。進むことも退くことも出來ぬ自らの境遇にあつて、私は幾日も幾週も獨でもだへた。

讀書もした。無茶苦茶にあさり讀んだ。救ひの手があつたら何にでもすがらうとした。然しそれは愈々迷宮に入るのみであつた。若しこの疑惑がその後起つた樣な經營上の苦難と共に來たのであつたら恐らく私は中途でこの仕事を投げうつたかも知れない實にあぶないことであつた。今にして思へばこれは私の教育觀の總ざらへであつた。それ迄の私は十年

◇雪の朝（小學部全景）

餘り幾つかの學校を經めぐつて來たが常に既成の學校へ行つて校舍の修繕をする樣に教育の修繕、つぎはりの樣なものをして喜んでゐたのであつた。然るに明星の仕事は私をして私の教育觀を、もう一度根底から考へ直す事を要求したのであつた。つぎはりではない、新なる建設をする新なる基礎を堅く造らねばならなかつたのであつた。かうして迷ひに迷ひを重ね、疑ひに疑ひをおいてゐる中に不圖示されたのはポーロの

「我は植え、アポロは水そそぐ、されど育てるものは神なり。」

の句であつた。私は突然かつて見なかつた廣い世界へ押出された氣がした。そこには私の知識、私の行爲と云ふものは殆んど役に立たぬ。そして或る偉大な力が自ら働いてゐるのであつた。私は餘りに自らの小さくをのみ恐れて、この世界に、然して幼い兒童の中に常に働いて止まぬ大いなる力に氣がつかなかつたのであつた。私はこれによつて讀方、算術の方法に對する何かの新工夫を得たのではなかつた。然し私は自ら生き、又兒童と共に生きる世界に樂しく入ることが出來る樣になつた。かうして彼のペンシルバニヤの殖民の初期に素朴な夜學校でクリストファドックスがした兒童の爲にたゞ祈る生活が實に教育生活の至極の境であることに氣が付いて來た。かくて長い夜が明けて來た。

秋は次第に深まつて來た。晩秋から初冬の武藏野は喩へようもない美しさである。學園の近くの森の茸狩りから始まつて栗拾ひ、薯掘り、大根引、幼い子等の仕事は數々あつた。殊に木の葉が赤に、紅に黄に、樺に、色樣々に紅葉する時分になると兒童の繪畫の力の伸びたことは非常なものであつた。これはこの年だけではなく、その後も年々秋來る毎に經驗したことであつた。

五、冬

大正十四年一月には一年二十二人、二年十六人、三年十九人總勢五十七人になつた。武藏野の冬は霜が實にひどい。朝は雪の降つた樣に白く地を蔽ふてゐるが、十時頃からぐしやゝに解けて、道も、庭も、野原も沼田の樣になつてしまう。靴の土は雪國の下駄につく雪の樣で、それが教室の中までも入つて來るのには閉口した。兒童は自然廊下だけで遊ぶ樣になつた。こんなことだつたら廊下をもつと廣くするのであつた。但し南に廊下をつけたので、こゝで遊べば、晴天でさえあればいつでも春の樣にほかゝしてゐた。

雪の朝は教師は吉祥寺驛まで兒童を迎へに行つた公園の杉並木の雪路をのぼつて來るのは私の樣な雪國に生れたものにはほんとに嬉しいことであつた。私はしみ〴〵と幼かりし昔の通學路を思出した。特に寒い日には晝食に豚汁を造つて皆で啜つた。小さな群ではこんな事も出來た。

三月になると上水の土堤の南側にはタンポ、スミレが咲き出し、ボケが紅の唇を見せ出した。やがて薄い霞がたなびき、雲雀が鳴き出した。天地の生命が復活して來るのを兒童が一日々々とみつめて暮すのもよいことであつた。かうして明星の第一年は終つた。

六、第二年

前年の暮からぼつ〳〵申込のあつたこの年の新一年の入學申込は男女各十五名、二月末には滿員にな

つて募集を打ち切つた。その後幾人かの申込はあつたがことはつた。勿論希望者を集めて試驗をして選ぶと云ふ樣なことはしなかつた。申込順に許可して滿員になると締切つたゞけのことである。條件としては

一、私達の教育法を理解し、私達と共働して下さる家庭の子供であること。

二、六ケ年はこの附近に居住して、兒童をこゝに通はせらる事情にある家庭の子供であること。

の二つを提示した。そして父兄母姉の方々、特に母なる人には學園の教師の一人の氣で居て下さること三十人の母、各々が三十人の子供を持つた氣になること「我子を善くせんとならば、どうかこの學級を善くして下さい。」と願つた。

かうして四月六日第二年の仕事が開始された時には四年二十四、三年十九、二年二十五、一年三十合計九十八と云ふ大きな數になつた。二十一名で開校した時に比べると正に五倍の大きさであつた。俄に大きな力が加はつた樣に思はれた。森の中の入學茱萸話會は暖い春光を浴びて、身も心もよみがへつた樣な心地であつた。同人には霜田靜志・大高義一の兩君が加はられた。これで同人も八人になつた。尙新しい一年生に生活を共にしたいと公同神學の江口忠八君、東京女大の佐藤靜子さんが來て私達の助け手になつて下さつた。新しい力が量に於ても、質に於ても加へられて、學園はゞみに賑になつた。

この四月の始めに顧問の澤柳博士は次の樣な文を私達に與へられた。

「拜啓、明星創立はや一年、光陰矢の如しとは實にその通りと存じます。誠心誠意盡力する事は第一ですが、方法も大切で、成城の如きも研究の方法、實地教育の方法に於て世間の學校の如く頗る不十分の所が多いと存じます。實驗的、科學的の方法が缺けては十分の効果を擧げ得ないと存じます。其邊について一層の努力を希望します。兒童數の增加は結構ですが、餘り順調過ぎるかと存じます。初めは辛抱する時期を經過したいと思ふ位です。自然に來るのでなくてはいけないと思ひます。人員よりも教育の實質實蹟を第一として進まれんことを、然すれば必ず盛になります。名の顯はれんよりは實の揭らんことを希望します……」

故博士の研究的態度、私達の學園の眞實の發達を希はれた御心が有難くもあらはれてゐる。然もこの「順調過ぎる」「辛抱する時期」と云はれたのが、直ちに私達の身にせまつて來たのは不思議なことであつた。私達をしてたかぶらせぬ樣との天意であつたのであらうか。噫、この思出を、もう一度親しく先生に語りたいものである。

七、死の陰の谷

一月八日、始業式の夜のことであつた。靜かな郊外の寓居の門をたゝいてけたゝましい「電報!」の聲が響いた。私の弟の死が報ぜられた。四人の男兄弟と誇つてゐた私どもの最も年若い弟が第一に欠けて行つた。三人の兄が末弟の死の床をめぐつて坐つた淀川ぞひの裏の家はほんとに寒かつた。これをはじめとしてこの年は同人の間に續いて不幸が重ねられた。二月には山本君が義母を失ひ、六月には大高君が愛弟にさきだゝれ、七月上旬には照井さんが慈母に別れた。學園創設の當時照井君の嚴父の死去に就いて一度考へさせられた私達は一年ならずしてまたも、かうして嚴肅な人生の事實に直面させられて深い物思ひに沈まざるを得なかつた。同じ行路を辿る友は各人各樣の想をいだき乍ら互にいたはり、慰め合つた。

然るに不幸はそれで終らなかつた。五月の初めからチブスの爲に入院してゐた小松崎君は七月十五日終に駒込病院で歸らぬ人となつた。一時經過良好を傳へられてゐたので聊か安心してゐる處へこの最後の知らせには一同愕然たらざるを得なかつた。理科教育の權威として、その博い知識は各種の著述となつて世に出てゐた。一週二回の同君の來校の日は兒童の大きな喜びの日であつた。それだけ同君は學者として、教育者として他に多く見ぬ偉大なる性格を持つてゐた。私達がかうして武藏野の眞中に校舍を建てたのはどうかして幼い子等に自然を愛する心情と自然を凝視する習慣を養ひたいと希つた爲であることは既にも記したことである。それだけ私達は小松崎君に大きな援助を期待してゐた。同君も種々の抱負をもつて過る一年を善く努めてくれた。井の頭を中心としての理科、動植鑛物から氣象、地文の樣なものを一丸とした兒童理科を打ち建てようとしておられたのだつたが、噫、創業僅か一年にして君を失はうとは何たることであらうか。一同暗然たらざるを得なかつた。夏休みになつた次の日、代表兒童と共に告別式に列した時には照り輝く七月の午後の陽も涙の眼には暗かつた。

八、大洪水

かうした內的な苦難の中へ更に經營上の苦難が迫つて來た。今迄私は我々の學園の經濟上のことは殆んど記さなかつたが、學園創設には經濟上の援助が

なければならぬものであることは云ふまでもない。それはさらに創設趣意書にも記してあつた樣に、私達同人を深く愛し、幼い子等の教育とこの國の文化の發達を深く憂へられる一後援者によつてなされたものであつた。最初の校舍建設費壹萬貳千圓、備品等に約貳千圓、それから日々の經常費不足の補充にこれまで約六千圓、合せて凡そ貳萬圓の金が與へられたのであつた。私達はそれによつて經營上の苦心と云ふものはこれまで殆んどなく過して來た。明星の第一歩の順調であつたのは實に隱れたるこの人の大きな義俠の爲で、これがなかつたら恐らくこれは出現し得なかつたやらうと思ふ。教育に於ける澤柳博士と經營に於けるこの人は學園が永久に忘るべからざる恩人である。私は今こゝにその人の名を記すべきであるが、どこまでも隱れたる後援を希望せられるのであり、又世間にはともすればかゝることに誤解を抱くものがあるから暫くそれをあらはにしないことにしよう。

然るにこの人の事業が朝鮮にあつた。それがこの年七月中旬の彼地の大洪水の爲に甚しい害を被つた如何なる失敗にも驚かぬこの人が、學園を思うて涙をこぼされたと聞いては私達も斷然決心しなければならぬことになつた。學園の經營は未だ半にも達して居らぬ。將來完成迄には尙數萬の金を要する。然し今は躊躇すべき時ではない。その御事業の恢復の爲にも私達は進んで暫くでもその援助を辭さなければならぬ。如何なる苦難も忍んで學園の完成を計らねばならぬと考へた。設備や校舍の增築のことは別に考へるとしても、經常費だけは獨立出來る樣にしなければならぬ。自給自足の道をたてなければならぬ。その第一の道は節約である。自らの生活は勿論のこと、學校の經濟も出來るだけ節しなければならぬ。然も當時兒童は百人を越ゆること僅かに數人、授業料は六百圓餘りに過ぎぬ、如何に節約してもそれでは自給の道がない。第二の道は父兄に訴へて授業料の增額を計ることである。嗚呼、朝鮮の洪水は武藏野の眞中までも影響する。同人の臺所を浸し、更に父兄の納戸を襲ふ。世界の連帶がつくづく考へさせられた。

幼い兒童の教育費は少くてもよいと云ふことはない。兒童の食物、衣服、靴、下駄の小さいことゝ教育費を一樣に考ふべきではない。一學級の兒童數から云へば小さい者程少人數でなければならぬ。幼稚園から小學校、中學校と兒童、生徒の年齡の增し、心身が發達すればする程その人數は多くなつてもよいものと私は思つてゐる。從つて小さい者ほど一人あたりの教育費は比較的嵩るものと考へてゐる。然しそれだと云つて高いほどよいとは云へない。出來るだけ安くして、あらゆる階級の家庭から自由に、氣安く入學出來る樣にしたいと思ふ。然るにこれまでの月謝六圓さえも安いとは考へられないのに、今や八圓にしなければ存立出來ない事情に立ちいつた止むを得ぬことゝは云へ、遺憾千萬なことであつた

私達は終に父兄に訴へた。いざとなると愈々心苦しく、情ないことであつたが終に訴へた。御互に苦しんで貰ひたいと云つた。然し出來ない方は素直に云つて欲しいとも云つた。私達も出來るだけ忍ばうと思ふとも云つた。然しさう簡單に解決するものではなかつた。「七才八才の子供に八圓の月謝を出して教育馬鹿親があるであらうか。ダルトンプランとはそんな價値のあるものであらうか。」とそれから幾日も經たぬ中に新聞紙に投書された。かゝることもあらんかと覺悟はしてゐたが、愈々となれば動せざるを得ない。暗い影が私達の心を蔽ふた。無理からぬ聲とも思つた。然し又、何故素直に云はれぬのかとも怨んだ。「都合の惡い方は從來通りに」とも云つたのに、何故それを素直に受けて貰へぬものかと淋しい氣持の中に腹立しい感もいだかれた。

だがそれは未だ苦しみの入口であつた。やがてポツリ〳〵と來ない子供も出來て來た。無邪氣な彼の兒、可愛いゝ彼の女、どんな理由で退かされるのと考へたやらうと思ふと胸は八つ裂きにせられる思がした。劇に見る金故の親子の別れ、それを私達は白日の生活の中に繰返さねばならなかつたので、追ひすがつてつれ返さうと幾度思はせられたか知れない然もそれは許されぬことであつた。更に殘れる子等が「先生、○○さんももう來ないのね」と云ふ時にはいだきしめて共に泣きたい氣持がした。行く者にも留まるものにも、噫、大きな罪を犯した。澄切つた秋の空に秀でる富士の姿を眺めてあはれにも小さい力ない我身を省られたことは幾回であつたやらうか然し又多くの父兄が私達の心をよく察して下さつたことも忘れてはならぬ。その心からの同情の言葉がなかつたら私達は終に自ら棄てねばならなかつたであらう。

九、增築

この樣にして明星の第二年は種々の苦難の中に過ぎて行つた。授業料の値上げはしたものゝ尙月末には少なからぬ不足を生じて同人は苦しい思ひをしなければならなかつた。父兄の方々の代る〳〵にあらはされる同情がなかつたらこれでも存續は困難であつたやらう。實に多くの人々の世話になりつゞけで

あつた。殊にこの年の暮、後援者の人がその至難な復舊事業の最中から年末の賞にとなにがしの寄附を與へられた時の感激の情は私達の永久に忘れられぬものである。除夜の晩、私は照井君と二人で白い月を眺めながら井の頭の森を更けるまでもさまよつた冴えかへる月は靜かに私共の歩みと共に歩んだ。二人は過ぎ越し一年を顧みて感慨に耽けつた。凡てが感謝すべきことのみであつた。

然し私達は新しい年がまたれた。そこに何か幸なものが待つて居る樣にも豫感された。あつてくれと祈られた。

開校の折に建てられたものは凡て利用してもう一教室も餘されてゐなかつた。もう少くとも二教室が增されねば小學校として完成しない。それが出來なければ次の年の新募集は見合はせるより外に道はない。そんなことも澤柳博士に相談して見た。然し博士はそれには絶對に反對された。何としても尻切れの學校にすべきでないと云はれた。それもさうである。然しそれは如何にすべきであるかわからなかつた。言葉に從つて新しい一年生が募集し、その申込みを受け乍らこれを何處へ收容すべきかに迷ふ狀態であつた。いよ／＼いけなければ音樂室をなしにしてやるか。さうも考へた。

然るに父兄の或る一人の人は終にこの窮狀を見るに忍びずして新なる增築の資を出して下さることになり、建築工事も他の一人の人によつて請負はれることになつた。うれしくも、不思議な救ひの手がこゝに現はれて來たのであつた。かくて二月の中旬から新しい木の香りと勇しい槌の音がし出した。やがて春が近づくに伴れて新しい二教室が現はれて來た高學年用の三間に四間半のもの二つであつた。廊下と出窓を入れて三十八坪二合五勺と云ふが三月の末には落成した。經費は三千圓であつた。

一〇、第三年

又一學級增した。新一年の爲に須田寧君を迎へ、五年も出來たので女兒の手藝、裁縫の爲に葉田秀さんを迎へた。同人九人、兒童は一年二十七、二年二十七、三年二十七、四年二十、五年二十九、合計百三十となつた。次第に大きくなつて來た。今樣寺小屋の小人數も望ましいが、又年と共に學級が增して大きくなるのも心地よい。此ところ聊かデイレンマの形である。三四人の同人が雜談的になして居た職員會の親しさも望ましいが、多人數で教育上の議論に花を咲かせるのも愉快なものである。然し近代式學校風に次第に近づくのも否まれぬ事實であつた。打合せ、規則と云ふ樣なものも漸次必要になつて來た。更に高學年が出來ると共にアカデミックな傾向が著しくあらはれて、これ迄の樣な所謂生活指導と云ふものだけでは濟まされぬ部面も多くなつて來た中等部を如何しやうかとの問題もそろ／＼皆の頭に考へられる樣になつた。然し前のあの苦難を辛じてぬけて來たところである。まだ小學部そのものも完成してゐない。大きな問題を未決のまゝにぶらさげて一同は日々の仕事に努力するより外に道はなかつた。

手藝、裁縫を女兒に限ることは私達の大きな疑問の一つであつた。何故男子にはそれを課せないのか女兒は手藝、裁縫をやるために手工、圖畫の時間を少くすべきではない筈である。それなら女兒のみがその科のために學習時間を多くすべきであらうか。それも理由のたゝぬことである。更に尋五でもう男女の性別を左樣に嚴密に考へねばならぬものであらうか。それも疑はしく思はれた。かうして私達は先づ試みとして男女共に手藝をやらせて見た。あみもの、刺繍は男兒も面白さうに一しよに習つてゐた。私達はそれが當然と考へた。然し父兄の或る人にはそれを無用のことゝ考へられたらしい。材料を買つて呉れぬ人もあつた。あからさまに無用論を唱へられた人もあつた。私達はそうしたものでないことを說いても見た。そして兎も角も手藝の間は進んで行つた。然し裁縫になつて、運針と云ふものが始まると男兒はもう寄りつかうともしなかつた。先天的か後天的か、兎に角にしようとしないことは明かな事實であつた。そうゝ／＼私達も兎をぬいだ。一般の樣に女兒は手藝、裁縫、男兒は手工と云ふことに改めた。名稱は共に美術科の一つとして圖畫と一つにしてゐるが、事實は分れてしまつた。これは今も私の疑問とするところである。

歷史や地理と云ふ學科も出て來た。勿論その前身である話方、讀方に於ける地歷は尋一から始まつてゐると云へやう。然し一つの教科として獨自の任務を持つた仕事が始まつて來た。それは如何に學習せしむべきであらうか。日本のすみ／＼迄も記憶するのが地理か。紀元元年から今日まで丹念に知るのが歷史か。そんな事も考へさせられた。かうして次第に現代小學校教育の諸問題の全班に對して私達も關心を持つことになつて來た。そしてわからず乍ら色々と研究の歩を進めることになつたのは私達の進展の爲によいことであつた。かうした新しい問題は自然最上級を受け持つ山本君から持出されるのが常であつた。それをきつかけによく論議の花が咲いた

一一、新讀本

大正十年頃から所謂新教育の思潮が勃興して以來新しい方法、組織の提示され、試みられるものは數限りもなかつた。我々の學園の創設された頃は實にその最も盛んな時で新學校として何か革新的なものが行はれるであらうと一般教育界から好奇の眼を以て見られてゐたことは事實である。その爲の參觀者も隨分あつた。私共も機を得て同人打連ひ彼方、此方の學校を見て歩いた。然しそれ等の間に於て一つ遺憾に思つたことは新しい方法は講じても新しい教材は多く考へられないことであつた。それには理由もあることであつた。小學校の教科書が國定されて凡ての小學校が必ずそれを學ばせねばならぬところでは教材研究とはその國定のものを詳しく研究するだけのことで、それ以外のものを研究する自由は與へられない。結局教育研究は文部省の定めた教科書を學習せしめる方法の研究に過ぎなかつた。それは止むを得ぬことであらうが遺憾なことに思はれた國定教科書は要するに一齊詰込みの教授法を豫想して造られたものであつた。從つてその學習法は自然限定せられてしまう。個人的に、自學的にやらうとすれば自然無理が出來る。一時澎湃として起つた個人學習、自學自習の勢も程なく凋落したのは多くの理由もあらうが國定教科書の外に出られなかつたことが大きな理由でなからうか。私はデウキならねど教材と教法は不可分のものと考へる。新なる方法は新なる教材觀と伴なはれねばならぬ。從つて新なる教材研究を私達の大きな仕事と考へた。

その爲に私達は謄寫板を實によく用ひた。種々の教材を集めてこれを謄寫して兒童に與へその反應の狀態を眺めて實際に兒童の興味、能力の發達に伴つたものを編成しようと考へたのであつた。然しそれは仲々容易な仕事ではなかつた。教材を調べ出しこれを原紙に書くだけでも兒童に追はれがちであつたこれを同人が自ら謄寫してゐたら恐らく兒童の旺んな要求に應じ得なかつたであらう。然るにそれには實によい助け人があつた。それは「おぢさん」の武さんであつた。學園の今日迄の仕事にこの人の力の如何に多かつたかは殆ど筆にも悉し難い。世間的に云つたら小使さんであるが、私達は誰も皆この人を、「おぢさん」とのみ呼んでゐる。その忠實なこと、その精勵なこと、然もその器用なこと、そして兒童一人々々の性格までも知ること、兒童についてわからぬことがあると同人はよくこの「おぢさん」に相談する位である。この武さんはかつて新聞社に居たことがあり、謄寫板の使用には天才的な技倆を持つてゐて、何百枚の謄寫でもまたゝく間にしあげて吳れるこの人がなかつたら私達の教材研究も恐らくその半分もなし遂げられなかつたであらう。

かうして兒童の反應を見て更に修正して、次の學年で又使用し、それを更に修正して、又次の學年に試みると云ふ風にして何物かを見出さうとつとめたのである。その中先づ最初に出來たのは大正十五年四月に出た「新讀本」であつた。これを最初に試みたのは照井君であつた。私達が未だ成城に居た頃、照井君はそこの一年生で試みたものを、明星に來て照井げんさんがこゝの一年で再びし、次に霜田君も大高君もこれを試みして結局四人の教師が百人近くの兒童に與へてその反應の模樣を見て修正し、それを集めて集成社から出版して世の批評を求めたのであつた。それは只今迄漸く四卷を出したゞけであるが近く第五、第六を出すことになつてゐる。私はこゝでその内容、編纂の趣意を詳しく述べておられないたゞかうした研究の方向を取つてゐることゝ、その成果が一つだけ出て居ることを報告するにとゞめやう。

一二、母の會

兒童の教養に母の力の大きなものであることは今更云ふまでもない。從つて學園の仕事にも私達は出來るだけ母の共働を求め、これを學園の教師の一人と做ふと考へた。それは單に兒童一個人の問題に對して教師と母とが十分に連絡しやうとしたゞけでない。母親達相互の間の理解と同情と共働をも望んだのである。一村一校のところ、祖先代々その村で暮してゐるところでは學校によらなくとも父母は互に知り、又互の兒童を知つてゐる。何某は誰々の子供とよくわかつてゐる。然し私達の學園の樣に寄り集つたところでは特別に學園を中心としてお母さん達が集つて來なければ互に知りやうもない。三十人のお母さん達が皆三十人の子供を持つたつもりでと希つたのはその爲であつた。創立の初期、まだ學園の教室にあまりのあつた頃その一つを母の部室としておいたのもその爲であつた。教師と母との連絡だけならばお母さん一人々々學園へ來てもよければ、教師が家庭訪問をしてもすむ。然し横の連絡の爲には母の會を開いて時々一しよに集まる必要がある。かうして學期々々の母の集り、時折の母の爲の講演會等隨分頻繁に母の會合を催して來た。お母さん方もその意味を領解してよく學園に來て下さつた。大正十四年の夏、十五年の夏、有志の兒童をつれて神奈川縣三戸の海岸

で十日の生活をした時の如きはつきそひのお母さん方によつて炊事の方は悉く引受けて下さつた。ことに十五年の夏行つた時には一兒童は猛烈な疫痢にかゝつて一時は危篤の狀態にまでも陷つたが、つきそひのお母さん方が我子の樣に看護して下さつたのはほんたうにうれしいことであつた。

かうして一年二年と年を重ねる中に學級々々でお母さん方の交が密になり、やがて他の學級との間にも交が加はり終に昭和二年の一月には母の會として形の備つたものがお母さん方の間に生れて來た。それは互の親睦と修養と學園の手助を目的とし、年壹圓の會費で講演會の開催、盆暮におぢさん、おばさんへの心付けなどを事業とする。更に有志の人々は自分の小遣を節約して學園と教師の危急の場合の爲にと醵金して下さつた。それは只今までに凡そ二千圓になつてゐる。苦しい學園の生ひ立ちを助けはぐくんだのはやはりかうした母なる人々の心からの同情であつた。兒童の教育そのものに於て、學園の對社會の問題に於て私達が屢々失望の淵に沈淪したとき私達を慰め、勵まして學園をこゝまで押して來たものは私達のお母さん方であつたことを忘れてはならぬ。

一三、第四年

第四年を迎へる前に私達のしなければならぬことがもう一つあつた。それは特別教室を增築することであつた。前年の增築で學級教室六つと音樂室が出來てゐたが學級教室全部に兒童が收まると音樂室が出來てゐたが學級教室全部に兒童が收まると音樂室が餘りに近いので困る。も少し遠ざけたいとの希望があつた。更に手工、圖畫の部屋も欲しいと思つた。終に父兄なる建築師の方は私達のこの念願を察して非常な義俠心を以て之をやつて下さつた。それはやがて起るべき中等部の問題も考に入れてこれ迄のものよりも大きく四間に五間のものにして音樂、圖畫の二室を別建物にして建てた。その間仕切は打ぬき式にして式日には講堂に代用出來る樣にした。これで小學部として全部完成した。すべて〻學級教室六特別教室三、それに職員室、小使室、物置、便所、百九十七坪となつた。顧みれば一々の行程には多少の困難もあつたが、その時〳〵の必要がかうして滿されて來たのを見ればやはり惠まれてゐたと云はねばならぬ。

かうして四月には新しい一年が出來、六學級總員百六十人の完全な小學校になつた。同人には松枝良作君を迎へて十人になつた。

一四、同人の研究

「新讀本」が照井君を主任として大高君、霜田君等の共同研究によつて發表されたことは既に述べた。照井君は更にそれと同じ方法によつて騰寫刷のものを兒童に與へて兒童と共働の樣な形で「兒童會我物語」上下二卷のものを集成社から發表した。更に同君には「分科以前の地歷」として尋四迄に武藏野附近を中心とせる太古から現代に到る地理と歷史を一丸とせるものを實地につき、文獻によつて研究し教授したものがある。他日それも發表せられることもあらう。要するに同君は地歷の研究主任として學園のこの方面の仕事をやつてくれてゐる。

山本君は最上級の受持として學園の新問題の開拓者であつた。その行程は恐らく私達の想像出來ぬ苦しいものであつたゞらう。同君の負けじ魂とあく迄も研究的な態度があとから行く者をどれだけはげましたかしれない。同君の學級が尋三、四の時代にあつた頃の仕事を顧みて作られたものは「尋三、四教育の實際」となつて文化書房から出てゐる。やゝともすれば忘れられる中學年の教育問題に火を點じたものとして貴重な記錄であり、光明である。今や同君は教育測定の問題に全身を沒してかゝつてゐる。これが大成の日がまたれる。

霜田同は數奇運命の人である。美術學校の師範科を出て久しく中等學校の圖畫科の教師として、日本の新圖畫教育の開拓者として既に周知の人。然もその念とするところは單なる描くことの技術を授けることに終らない。圖畫に於て人格を、生命を、それが同君の念願であつた、かくて同君は美術科の問題から藝術一般の教育問題に入つて來られた。同君が「藝術教育」を編輯し、我國の藝術教育運動の陣頭に勇ましく戰つたのはこの爲であつた。それでも尙同君は滿足出來なかつた。終に教育全体、兒童そのものを目標とする仕事に入つて來ざるを得なかつた。同君が一切の經歷と一切の背景と一切の地位をすて一學級教師となつて我學園へ入られたのはこの爲であつた。その眞摯なる、その熱烈なる努力は同人はもとより、父兄の人々も感激おかない。勿論その仕事は悉くの父兄の喜ぶところではなかつた。その教育上の主義、方法に異議をはさんで兒童を退學させたものも幾人かあつた。その爲に私は同君と共にほんとに悲しんだ。十分に理解を求めやうと盡しもした。然し駄目だつた。だが同君はその爲に自分を曲げやうとはしなかつた。刹一念は動かさなかつた。これは我學園の同人凡てに於てそうであつたが同君に於て特にさうであつた。開拓者の苦難はこんなところにもある。私はさきに父母の方々が非常な同情

を持つて我々の仕事を助けて下さつたことを書いたそれは正しくそうだつた。然しこれが理解し得ず、否理解しようともしないで去つて行つた人もあることを記さねばならぬ。勿論私は敢てそれをとがめはしない。人々互に考へがあらう。たゞ私達は私達の道を歩みたいと思ふだけである。同君のこの仕事の初期の記錄が「藝術を基調にしたる低學年教育記錄」となつて平凡社から出て居る。その他大高君の國語松枝君の生活指導、須田君の數學教育、各々獨自の境地から研究を進めて居る。他日それ〴〵發表されることがあらう。

一五、中等部の問題

この年の始め頃から中等部の問題が次第に起つて來た。一般の小學校では五年生から中等學校への入學準備をするそうである。私達は如何にすべきであらうかゞ最上級を持つ山本君の大きな惱みであり、同人凡ての頭を痛めた問題であつた。小學校教育の本質から云へばこんなことは問題にはならぬ。誤まれる中等學校の教師の教育觀に迎合して準備などはなすべきものではなからう。然し兒童にとつては中等學校へ入られぬと云ふことは大問題である。父兄に於てもそうである。この現實の問題に當面すると理論ばかり云つておられぬ。父兄(特に五年)の間にも不安な氣分が次第にあらはれて來た。然もこゝは經費と關連する。同人は集る毎にこれが問題になりほんとに鳩首したものである。或時は私は出て、某中學校の經營をひきうけ、それをこの學園の中等部としようと計つたこともあつた。然しそれも思ふ樣にはならなかつた。この年の春全部が完成し、六年生が出來た當時、この問題に對する私達の態度位不安なものはなかつた。

がこれも既に記した母の會の熱心なる働きが次第に父兄の人々を動かし、父兄の有志の集會が頻繁に催される樣になつた。それが夏から秋へと次第に胚んになつて終にこの年十月二日を以て父兄の總會が開かれ、明星學園後援會なるものが組織せられて、それが中等部の設立をひきうけて下さることになつた。かくて上田八一郎君をこの方の主任として迎へて設立の準備に着手してもらうことになり、山本君も落付いて六年の仕事を進められる樣になつた。曾て成城小學校でそこの父兄後援會の獻立をした私はその困難な仕事であることを十分に知つてゐたので、こゝで再びそれを繰返さうとはほとんど考へなかつた。何人か特志な人があつたらその人にこのみ願つてゐた。それに學園の父兄は實際のところ富豪と云はれるものではない。兒童の教育に熱心であることは云ふこの外には一般小學校の父兄と左程に違つては居らぬ。その事情を十分に知る私はほんとにかゝる後援會によつて中等部、然もそれは一つではなく、女學部、中學部の二つを設立してもらうと云ふことは忍び得られぬことの樣にも考へた。屢々自ら回避の道を取らうかとも思つた。然し金があれば出來ると云ふ問題でもない。金よりも熱情であり、理想であり、和合であると思ふとかゝる父兄なればこそ出來るのだと考へた。自らの子女の教育の機關を自ら經營すると云ふことは最も望ましいことで、第三者から慈善的に出された金の惠みにあづかつて行くのが必ずしも能でないとも考へた。行かう、行けるところまで行かう。皆が和合して行つたならば、そして大なる理想に向つて努力をつゞけたら如何なることも成らぬと云ふことはなからう。と云ふ樣な風にも考へられて終にこれに一切を御願ひして進むことになつた。

かうした土地の選定、校舍の設計、教科課程の研究等に夜の八時、九時迄も職員會が幾晩もつゞき、後援會の委員の人々の奔走が日夜營まれて、この年の暮は實に忽忙として暮れた。

一六、第一回卒業式

昭和三年三月二十一日第一回の卒業式をあげた。男十四、女十三であつた。最初九名で出發したのであつたが次第に增加し、途中轉學のものもあつたがこれだけのものを小學部の第一回生として送り出されたのは實に愉快であつた。學園の最上級、兄、姉分として善いにつけ、惡いにつけよく議題になつたものであつた。恐らく同人の凡てが關心を持つたことこの組ほど多いものはなかつたゞらう。私自身もこの組ほど親しくしたものはなかつた。私の宅によく泊りに來たのもこの組であつた。日曜日に有志のものと遠足を試みたのもこの組であつた。家庭に於ける長男、長女と云ふものに對する父母の心づかひもかうではなからうかとも考へられた。餘りに氣を遣ひ過ぎて兒童等の爲にならぬところもあつたかも知れない。最上級々々々と無理な要求もせられたかも知れない。早くから大人扱をさせられたかも知れぬ。兎に角にこの組の卒業位またれたものはなかつた。この組の進みと共に種々の經營上の仕事、校舍の增築や、備品の充實が計られたのであるからこれ等も無理からぬことであつた。それが愈々卒業したほんとに嬉しかつた。

その日は彼岸の休み日、暖い好天氣であつた。山本君が學級主任として學事の報告をなし、こゝで謹

(毎月一回廿二日發行)
印刷所 中村兄弟商會印刷所

大正十一年四月五日 第三種郵便物認可
渾沌
昭和四年一月十九日印刷納本
昭和四年一月廿二日發行

書を渡して私はかう云つた。

「四年前の此頃私共がこゝに學園建設の仕事にかゝつた時にはこゝは麥畑であつた。此頃あちこちの麥畑に見える樣な三四寸の麥がこゝにも作られてゐたのであつた。私共は校舍を建てるには先づその麥をさつて地均しをしなければならなかつた。私は人夫の人々が麥を取除いてゐるのを見て空恐ろしい感に打たれた。一つは百姓の人々がこれ迄に丹精したものをむざ〳〵と取り棄てることがその人々に對してまことに濟まないことだと考へられたのである。今一つはこの麥が實ればそれで幾人かの生命をつなぐことが出來る。その麥を取り棄てると云ふことの勿躰なさであつた。昔或る名僧が便所で飯粒を發見して、それを勿躰なく思つて塵を拂つて押しいたゞいて食つたと云ふ話もある。かゝる貴い食物を私共は取り棄てるのである。私はこれは何か大きな罰が來ないではすまない樣な氣持がしたこれは非常に大きな收穫をして償をしなければならぬと考へた。人々の食ふ糧は作れないが、人そのものを造ることに努めねばならぬと考へた。然しそれから後春來る毎に他の畑には麥が青々と生じ、夏來る毎に黄く實つたが私共の學園には實りがなかつた。私はいつも淋しい氣持で私共の收穫は何時かと今日の日を待ちに待つた。然し終にその日が來た。私の心は今漸く平になつた。慶び限りない。然しこの實りは如何であらうか。豊作か不作か。それは全く君達の今後の生活如何にある。どうか大きな實りであつて欲しい。昔から初穂は神に献げるのがならはしである。私共の學園も初穂なる君達を神に献げねばならぬ。君達も献げられた身であることを記憶して身も魂も清く保ち大君とこの國と、この國の人々に奉仕して行く人となつて欲しい……」

それから來賓朽内海軍大將、父兄總代岡崎氏の挨拶があつて式を閉ぢ、つゞいて卒業生のみのなす學藝會を催し、別室では卒業生のみの展覽會をした。會終つて母の會の人々の手製の御馳走で卒業生を中心に一同立食、歡喜のみなぎる會をした。

▽二月ペスタロッチー號

稿本隱者の夕暮

ペスタロッチー原著
稿島政雄譯

昨年企てゝはたし得なかつた「稿本隱者の夕暮」をいよ〳〵二月號にのせ、ペスタロッチー號として十七日の命日に發行いたします。尙ほ同號には泰四郎氏の「意譯隱者の夕暮」をものせて對讀に便にします。

特別に豫約を申込まるゝ向は二月五日までに願ひます。團體申込一部拾錢でいたします。

一七、をはりに

松本君

以上明星の四年間の仕事の概略をのべた。第五年には小學部の第一回卒業生を以て中學部、女學部を組織し、四月二十日文部大臣の認可が與へられた。御大典のあげられた年、昭和維新の年に私達の學園も第二の誕生をしたのである。かう記して來るとこに苦心があつたかと人はいぶかるであらう。順調過ぎるとも思はれるであらう。實際感謝すべきことのみである。たゞこの樣な惠まれた發展の間に私達の教育そのものはどうなつたか。それを思ふ時私の心は内にうなだれる。私はもつとそれを述べねばならぬのであつた。然しもうペイジがない。私はそれを他の機會にゆづらねばならぬ。たゞ學園を創設した當時と今は我社會も非常に變つて來た。私自身もこれをやることによつて色々と考へさせられ、幾分進展したかと思ふ。世間には苦しみの中に樂しみを見出すと云ふ言葉があるが、打開けたところ私はまだ苦中に樂は見出し得ない。苦しみはもう御免蒙りたい樣にも思ふ。然しあれやこれやと種々の苦しみを嘗めてゐる間に私の人生觀、社會觀、從つて又教育觀が幾分づゝでも開け來るのを最大の收穫と思つてゐる。今後尙幾年かの苦しい生活がつゞくだらうが、その間にも更に私自身の眼の開かれて行くことを望み、待つてゐる。兒童を教育すると云つて實は自ら教育せられてゐるのである。

黎明の空にさきがけま輝く望の星よとはに輝け
苦昏の空にきらめく「永劫の國」のしるべよとはに輝け。

と兒童と共に歌つて私も星をめあてに進まうと思ふ。

賀正

昭和四年正月元旦

渾沌社

本誌一部 拾貳錢（税共）
（一年前金壹圓貳拾錢）

發行所 東京府瀧野川町田端三五五
廣島市皆實町六四

渾沌社（振替金澤五五六〇番）
渾沌支社（振替下關八九九五番）